

Title	鐵齋書讃
Author(s)	金杉,光子
Citation	懐徳. 1956, 27, p. 65-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 杉 光

子

明

大正時代の日本畫集を繙くと、

断然鐵齋の作品

れは私が東海道線の汽車の窓や、 どの遠景に望む すぐ大雅堂や北齋など、又、和田英作や、梅原龍 と納得できるのである。 題を書いている。 と見てもいゝような、大きな(まるで見出しのような)盡 は異彩を放つている。 E に先 力 は 1 士はまさに不盡のおもしろさを持つている。 士の竈姿と何ら矛盾しないからである。然し、 たくなる。 のような題名が附してなかつたら、一體何だろう フ は になつ 的 先づ「不盡山 な富 富士山の全景でなく畫題どおり、頂の部分が 雷 7 士のイメー だから、なるほど富士山 鐵齋は、その圖の左上に、 いることである。 士山の代表作を頭に浮べてしまう。そ 項全岡」に驚嘆する。 私達は、富士山の圖といえば、 ジを完全に裏切る。その異様 東京の街から遙か眺め それが眺めた冨士で の頂なのだな 叉納 4 Ļ 第一に 三郎な の一部 この 鐵齋

> 成が、 そこに彼特有のリアリズムがある。 登り道が岩の間に見え隠れし、小さな小舎の屋 個々の岩にムーブメントがあつて、その不協和音的な構 しい)の不規則な突出、それが質にリズミ ない。 この雲の筋を境にして畫面にない裾野を感じさせるのも のがわかる。 又、あるところには草の一本一本も細かに描 る。 怖るべき手腕である。雲一筋の流れで、 たる雲の海である。左右の下の方にその流れが見える。 な効果を醸し出している。 ると同時に、 たように見せかけ逆に山頂と麓と直結した矛盾を抱 一人が鐵齋であるという人もある。) 頂の下の方は 渺茫 5 ţ, とに角、 あくまでも鐵齋の質感の 創造した 不盡山頂 であ 又、それを客觀的に再 やに 叉、三人程の登山者も見える。 ボリュ 頂の遙か下に裾野の擴がりを想わ 草鞋 1 で踏 ムを感じさせる。それ み これは私達の概念の富士では しめて登りつ 現した富 奇怪 な山 主 め 頂と裾野を割し なので カルであ 頂 (その中 かれてい に加えて、 根もあ の岩 せるよう ある。 0) Ď (b) か 'n 'n 世

時代である。とかく文人の手すさびになるものが純粹藝 うあだ名で繪畫藝術からすでにはじき出されてしまつた この作品は鐵齋の中期、六十六歳の時の制作であ 九〇 一年)文人畫の類型のものが、「つく芋山 水しとい る。

戯

に見える洞

中で、

わゆる白隱と白幽雨

人ともが

と彼は一言のもとに「俺は學者だぞ。」と豪語して 受 け人が鐵齋に、彼の繪について何か評批めいたことをいう術から閉め出される憂き目に逢つたにもかゝわらず、他

附けなかつたという。

世間がどう評價しようと、

社會の

る。墨繪や南畫風の淡彩の手法でありながら、當時の西生命力の充溢した新鮮な感覺を思うままに表 現し て い彼の强烈な自我を繪畫によつて表現するこを止めなかつ風がどう吹こうと彼は儒學者であることを誇り、しかも

が

なかつた對象を實感として把握しなければ

上まなかつ

こういう彼の獨自の作風こそ、

鐵齋が生涯

난

ているのである。

期の禪傑白隱が修業時代に健康を害したので白幽という彼八十五歳の時の作品「白隱訪白幽子」の圖は德川初いる。

させた

のであろう。

歐のキュ

ビズムを思わせるような作風は絶頂になつて

感じ見 では 圖のジグザクの山道の雨端の笹や樹は極めて黒々とリ ことである。 度も訪れ、 ちろん想像畫であるが、 いるという光景を描 隠士を白川村の洞窟 ないのであろうが、 たものに質に逞し 又洛北白川村の山中の洞窟も探索したと 描くためのみ 温に訪れ たものである。素材としては、 これでもわ 鐵齋は東山にある白幽の墓に幾 い て、 創造力を發揮 の目的で質地 内観法を授けてもらつて かるように に踏 している。 んでみた 彼は直

に描かれ

7

るのに、

山道の上にあたかも乗つたよう

ルな筆法と奇想な樺闘が融和して實在感を如質に感じさのである。こゝにも「不盡山頂全闘」に見るようなリアにその場のはつきりした雰圍氣すら見る者に感じさせる

上の役者のようにこちらを向いて談話している様は臀

の藝術精神にまで相通ずるような卓絶したものを産み出それが東洋的な非現質性や纖細さを超越して、近代西歐た執拗なまでのリアリティの追求の凝集なのであろう。

鐵齋先生、「俺は學者だぞ。」と例の奇妙な岩の間から一全圖」の中の登山者の一人、八十九歲の長壽を全うした私がこんな鑑賞めいたものを書いていると「不盡山頂

喝しそうである。